

ホーム・ラン

木澤 美恵子

人物

大岩茂三(19) 浪人生(女)

大岩吾郎(50) 茂三の父 不動産店経営

大岩由実(46) 茂三の母

伊藤治(24) 医大生

立花加奈(19) 茂三の高校の同級生

コンビニエンスストア(朝)

会社員や学生がサンドイッチやお弁当を買って足早に出て行く。

大岩茂三(19)が雑誌コーナーで真

剣な表情で漫画雑誌を手取る。

茂三「目をつぶってつばやく。

茂三「今度こそ、お願いします」

茂三「深呼吸を相手からページを開く

レジで精算していた立花加奈(19)

が茂三に気がつき、声をかける。

加奈「シゲゾー」

茂三「気がつかないふりをする。

加奈「シゲゾー、久しぶりじゃない」

茂三「諦めたように加奈の方を向く

茂三「加奈、シゲゾーはやめてって言ってな

かったっけ」

加奈「えへへ、ごめんねシゲミちゃん。茂三

の大学も夏休み」

茂三「浪人中だって」

加奈「茂三が手にしているマンガ雑誌

に気がつき、

加奈「まだマンガかいてるんだ」

茂三「一応・・・」

加奈「へえ」

加奈の携帯電話が鳴り出す。

加奈「ごめん、行くね。デビューしたら教え

てね、お祝いしよ。じゃあね」

茂三「華やかな服装の加奈の後ろ姿と

普段着の自分を見比べて、ため息をつ

く。

茂三「改めてマンガ雑誌を開く

茂三「また、あと一歩賞か・・・」

大岩家・外観(朝)

住居兼大岩不動産店舗の建物

不動産の看板の脇に「大岩吾郎 由実

茂三」の表札がある。

不動産店舗の窓ガラス一面に貼られた

物件情報の中に「野球部員熱烈募集

中

の黄色のチラシが目立つ。

同・居間・中(朝)

店舗奥の居間で大岩吾郎(50)と

大

岩由実(46)が朝食を食べている。

壁にかかっている野球チームの集合写

真の中に若い吾郎の姿がある。

茂三が入って来る。

由実「珍しいわね、茂三が早起きなんて」

吾郎「茂三、先生来る前に少しは部屋掃除し

とけよ」

茂三「先生」

吾郎「医大生をスカウトしたんだ」

茂三「何それ勝手に」

吾郎「この間の模試、お前、一生医学部なん

かに行けない点数だったぞ」

茂三「行きたくないかない」

茂三「吾郎に聞きとれない大きさの声

でつぶやいて居間を出て行く

同・茂三の部屋・中

茂三「机でマンガの原稿をかいている。

絵はキラキラとした少女マンガ。

机の上はペンやスクリーントーンなど

マンガの道具が散乱している。

由実の声「茂三、先生がいらっしやたわよ」

茂三「慌ててマンガの道具をかき集め

て引き出しの中に入れ、マンガの原稿

を本棚の奥に押し込む。

x x x

伊藤治(24)が茂三に数学の問題を

説明している。

茂三「問題集は開いているが聞いてい

ない。

伊藤「その公式は、えっと・・・」

伊藤「本棚から参考書を取り出す。

マンガの原稿が床に散らばる。

二人「あっ」

同・居間・中(夜)

茂三「吾郎、由実が夕飯を食べている。

テレビから野球中継の音。

吾郎「桑田はもうだめだな。おい、どっした先生の方は」

茂三「別に。二階書くて勉強なんかできないよ」

吾郎「そうやってお前はすぐ弱音を」

次の瞬間、吾郎、テレビに釘付けになり、

吾郎「ホラ、打たれた。交代だ交代」

茂三「乱暴に茶碗をまとめて席を立つ。」

**同・茂三の部屋・中(夜)**

茂三「机でマンガをかいている。階段をダンダンと上ってくる音がする。茂三「慌てて原稿とマンガ道具をしまい、机の上に問題集を広げる。吾郎、戸口に現れる。」

茂三「なに」

吾郎「暑いか」

茂三「死にぞつ」

吾郎「あんまり遅くまで無理するなよ」

吾郎「出て行く。」

茂三「吾郎が階段を降りて行く音を聞いて、再び原稿と道具を取り出し、マンガをかき始める。」

**同・外観(早朝)**

一階の茂三の部屋の明りがついている。運動着姿の吾郎が家から出てきて、軽く準備体操をした後、走り去る。

**同・外観**

吾郎が大きな箱を持って家に入る。

**同・茂三の部屋・中**

巨大な冷風機がガーンと大きな音をたてて風を出している。

茂三「昨日の服を着たまま寝ている。茂三「うなされている。」

茂三「キヤーつぶされる」

茂三「ガバツと起き上がり、ハア、ハアと大きく呼吸する。」

茂三「寝かけた様子で冷風機を見る。」

茂三「・・・戦車」

**同・居間・中**

茂三「吾郎、由美が昼食を食べている。テレビから台風情報が聞こえてくる。アナウンサーの声、大型で強い勢力の台風12号が本州付近に近づき・・・」

吾郎「どうだ冷風機、涼しいか」

茂三「全然。それより人の部屋に勝手に入らないでよ」

吾郎「お前、電気つけっぱなしで寝てたぞ」

茂三「だから、勝手に人の部屋に」

電話が鳴り、吾郎が取る。

吾郎「はい、大岩です・・・鈴風・・・うちは大岩です」

茂三「ハツとして電話の方をうかがう。吾郎「だから、うちは大岩です。さやか・・・そんな名前の者はいません。『サファイア編集部・・・いや知りません』」

吾郎「電話を切るつとずる。」

茂三「慌てて受話器を奪い取る。」

茂三「代わりました・・・そうです、私です。」

ハイ、ハイ、ありがとうございます」

吾郎「あつげにとられ茂三を見る。」

茂三「ハイ、ハイ、がんばります。ハイ、ありがとつございました」

茂三「受話器を置いてつとつと由美をみつめる。」

吾郎「何だったんだ」

茂三「ポーとして」

茂三「もう少しがんばれば、入賞できるとして吾郎「何のことだ」

茂三「ハツとして、

茂三「模試の結果よ。もう少しで合格圏内だつて」

吾郎「本当か。最近、お前がんばってたしな」

茂三「あいまいに笑う。」

由美「心配そうに茂三を見る。」

**同・茂三の部屋・中**

伊藤「茂三のマンガの原稿を見ている。キレイな絵とキレイな話だけじゃおもしろくないって言うてました」

伊藤「うーん、確かにちよっと肩に力が入っているといつか・・・少し現実離れしているといつか・・・」

茂三「そつでしようか」

伊藤「あと、鈴風さやかってペンネーム、な

んか宝塚みたいだね」

茂三「キッと伊藤をにらむ。

茂三「私の小学校以来のあだ名わかりますか」

伊藤「えっ」

茂三「シゲゾーです。誰も最初はシゲミなんて読まなくて、何度男の子と間違われたことか。いくら長島ファンだからって、茂雄と青番屋」から娘の名前つけます、普通」

伊藤「うーん」

茂三「私絶対本名でなんかマンガかかない。

大岩茂三なんてこいつい名前前のマンガ家想像できますか」

伊藤「立派な名前だと思っけど・・・」

茂三「マンガ家は、名前を変えられる仕事だから憧れたんです。もうすぐ大岩茂三とおさらばできるんです」

### 同・茂三の部屋・中(夜)

茂三「机で必死にマンガをかいている。

冷風機の大きな音で階段の音が聞こえない。

吾郎が戸口に立っている。

吾郎「おい、まだ寝ないのか」

茂三「ビクツとして慌てて机の上のマンガ道具をかき集めて隠そうとする。

茂三「うーん、もうすぐ寝るよ」

吾郎「あんまり無理するなよ。おやすみ」

吾郎「出て行く」

茂三「ホツとして再びマンガをかき始める。

吾郎が再び部屋に入ってくる。

吾郎「お前、何か隠してるだろ」

茂三「うろたえて机の上を必死に隠し

茂三「な、何よ。入ってこないでよ」

吾郎「机の上のマンガ原稿に気がつく

吾郎「お前、何やってんだ」

吾郎「原稿を取り上げようとする。

茂三「何すんのよ。返してよ」

茂三「原稿を取り戻そうと引っぱる。

原稿の一枚が破れる。

茂三「あー」

吾郎「自業自得だ。勉強もしないで」

茂三「信じらんない。返してよ、私の原稿」

茂三「机につっぱして大声で泣き始める。

由実が入ってくる。

由実「どつしたの、何事よ」

茂三「お父さんが、お父さんが」

吾郎「こいつがマンガなんかかいてたんだ」

茂三「原稿破ること無いでしょ」

由実「二人とも静かになさい、夜中よ。茂三

後ろからテープで補強すれば直るでしょ。

お父さん、明日久しぶりの試合でしょ。早く寝てください」

由実「吾郎を追い立てるようにして出て行くとする。

茂三「お父さん、私、絶対医者になんかならない。マンガ家になるから」

吾郎「何だと」

由実「お父さん、茂三、話は落ちついて明日

しましょ」

吾郎「茂三、俺は絶対認めないからな」

茂三「出てっつてよ、早く」

吾郎「由実、部屋を出て行く」

茂三「机につっぱして泣く」

茂三「あれっ、先生だ」

由実「最近メンバー集まらないから、お父さん無理矢理勧誘したみたい」

茂三「大丈夫かな・・・」

を見て、ため息をついている。

冷風機は止まっている。

由実「入ってきて茂三の様子を見て、

由実「茂三、少し気分転換なさい」

### 川原・堤

茂三と由実が川原の土手を歩いている。

川原の広い部分はグラウンドになっていて、野球の試合が行われている。

茂三「野球のメンバーの中にユニフォーム姿の吾郎を見つけて、

茂三「お母さん、私帰る」

由実「せっかとお弁当持ってきたんだから、食べましょ」

由実「腰をおろしてお弁当を食べ始める。

茂三「一瞬迷うが由実の横に座ってお弁当を食べ始める。

茂三「あれっ、先生だ」

由実「最近メンバー集まらないから、お父さん無理矢理勧誘したみたい」

茂三「大丈夫かな・・・」

同・グラウンド

ブカブカのユニフォームを着た伊藤が  
バッターボックスに立つ。  
一球目 タイミングが全く合わず、伊  
藤大きく空振りし、尻餅をつく。

同・堤

茂三「あちゃーと手で顔をおおつ。  
茂三「プププ・・・でも、先生みたいなキヤ  
ラクターでマンガかけそう」

由実「マンガのことばかりなのね。皮肉な  
ものよね、お父さんが読ませた野球マンガ  
がきっかけなんて」

茂三「医学部受験って言われても、病院の話  
考えちゃうしなあ」

由実「ちゃんと話せば、お父さんもわかって  
くれるわよ」

茂三「本当にそう思ってるの。だってあのお  
父さんだよ」

由実「お父さんだって野球の夢が・・・」  
茂三「田島建設の「U」口打たせの「U」で

有名だったって話でしょ。昔の「ごじゅん」  
私の夢には理解ゼロだし」

由実「お父さんなりに、茂三の幸せを考えて  
るのよ。お父さんが働けるうちに、茂三に  
大学行かせてあげたいって」

茂三「でも、だいたい私に医者になれなんて  
先生がホームランうつようなもんだよ」

同・グラウンド

伊藤が奇跡的にバットに球を当てる。  
打球は高く飛び、外野選手の上を越え  
ホームランとなる。

伊藤「ポカンと立ちつくす。  
吾郎が何か大声で言う。  
吾郎のチームがワツと沸く」

同・堤

茂三「伊藤のホームランを見て茫然  
茂三「うそ・・・」

由実「あなたががんばりなさいよ」  
茂三「お母さんまで医者になれって言うの」

由実「対お父さん戦よ」  
大岩家・茂三の部屋・中(夜)

茂三「机に向かっているがペンを指で

回したり落したりしているだけ。

外から吾郎の大声が聞こえてくる。  
茂三「部屋から飛び出して行く」

同・不動産店舗・中(夜)

酔っぱらった吾郎、伊藤の肩に手を回  
して離そうとしない。  
由実「先生、すみません送っていただい  
て・・・」

伊藤「いえ・・・」  
吾郎「先生、今日から正式部員だからな  
伊藤「かんべんしてくださいよ」  
吾郎「先生、入部を祝って飲み直そお」

伊藤「横に立っている茂三のこわばっ  
た表情に気がつく」

伊藤「いや、僕はこれで失礼します」  
茂三「吾郎の正面に立つ」

茂三「お父さん、聞いて、私、マンガ家にな  
りたいの。認めてください」

吾郎「もっと普通の幸せな道を選べ」  
茂三「普通の幸せってなによ」

吾郎「ちゃんと大学行って資格を取って、安  
定した仕事についてたなあ、自分の家庭を

持ってたなあ・・・」

茂三「そしてお父さんみたいにリストラされ  
て、田舎でひいひい言いながら不動産な  
んかやることになるの」

吾郎「なんだと」  
茂三「私はやだ。そんなの」  
吾郎「お前は、勉強とか働くことから逃げ  
てるだけだ」

茂三「逃げたのはお父さんじゃん。野球、途  
中であきらめて」  
吾郎「お前に何がわかる。養ってもらってる  
くせに」

茂三「結局、それなんだよね。もう、いいよ。  
出てはいいでしょ」

茂三「部屋を飛び出して行く」  
由実「茂三」  
吾郎「机に拳を叩きつける」

同・居間・中(朝)  
吾郎と由実が黙々と朝食を食べている。  
テレビから台風情報が聞こえる。

アナウンサーの声「大型で強い勢力の台風二  
号が本州に上陸しました」関東・東海地

方

では強い風と雨が予想されます」

茂三「大きな鞆を持って居間に来る。」

由実「茂三、なにその荷物」

茂三「家出てく」

由実「出てくってどこに」

茂三「とりあえず、東京の友達の家。住む所

決まったら連絡する」

由実「茂三、ちよつと待ちなさい。お父さん

も何か言ってくたさい」

吾郎「勝手にしろ」

茂三「お父さん、私の名前なんで茂三なんか

にしたの。お父さんに夢くれた人からつけ

たんでしょ」

吾郎「・・・」

茂三「なに私は反対するんだね」

吾郎「・・・」

茂三「・・・長い間お世話になりましたっ」

茂三「居間を飛び出して行く」

由実「茂三」

由実「茂三を追いかけて行く」

閑散としたホームのベンチに茂三が座  
っている。

駅アナウンス「台風22号の影響による強風

のため本日は列車の運転を見合わせており

ます。お急ぎの所大変ご迷惑をおかけしま

すが・・・」

茂三「今日にかぎって」

茂三「いらいらとして立ち上がる。」

同・公衆電話・外

茂三「公衆電話をかけている。」

茂三「あつ加奈、茂三。突然で悪いんだけど

今日さー、えっ彼氏来てるの・・・うっん

何でもない。大丈夫。またね」

茂三「受話器を置き、振りかえる。」

そこに吾郎が立っている。

茂三「一瞬度肝を抜かれるが、すぐに

吾郎をにらみつける。

茂三「なによ」

吾郎「まだあきらめる気ないのか」

茂三「さらににらみつける。」

吾郎「手に持っていたバットを茂三に

示す。

茂三「な、なによ」

吾郎「来い」

川原・グラウンド・外

雲が速く流れている。

茂三「吾郎の他に由実、伊藤がいる。」

吾郎「これから三十球投げる。お前が一球で

もヒット性の当たりを打ったら、お前の勝

ちだ。マンガ家でも歌手でも好きにしろ」

茂三「・・・もし打てなかつたら」

吾郎「おとなしく家に戻って真面目に勉強し

ろ」

吾郎「バットを差し出す。

茂三「少し考えた後バットをつかんで

バッテリーボックスに立つ。

伊藤がキャッチャーの位置でかまえて

いる。

伊藤「なんで僕がまたこんな役を・・・」

茂三「私こそ、なんでこんなスポ根勝負で自

分の人生決めなきゃなんないの」

吾郎「早くかまえる」

吾郎「一球目を投げる。」

かなり速い球で、茂三は全く反応でき

ない。

伊藤「やっ」といって感じて球を受ける。

由実「ボードにチヨークで横一本線を

書く。

吾郎「お前、父さんが夢から逃げたって言っ

ただろっ。逃げたんじゃない。家族を養っ

て一生野球をやっていく道を選んだんだ」

吾郎「二球目を投げる。」

茂三「空振りして、前に転ぶ。」

吾郎「お前の浮ついた気持ちで打てるはずが

ない」

茂三「立ち上がり、

茂三「打つよ。やる気になってきた。こっち

だつてねー、お父さんの野球のせいで苦勞

してきたんだから」

伊藤「勝負の趣旨がスレてきたような・・・」

吾郎「投げる。」

茂三「ナイター以外のテレビを見せろ」

茂三「空振り。」

吾郎「投げる。」

茂三「茂三なんて名前はいやだ」

茂三「再び大きく空振り。」

x x x

田加田駅・ホーム・外

ボードの正の字が5個ついている。

茂三「吾郎ともかなり疲れている様子。」

吾郎「投げる。」

茂三「空振り。」

吾郎「先生も打てたんだから、お前だって運があれれば一球くらい打てるはずだ」

茂三「伊藤をにらみつける。」

吾郎「投げる。」

茂三「空振り。」

吾郎「長島は、チャンスには必ず打つ選手だったんだ」

茂三「ぜんぜん関係ないでしょ」

吾郎「投げる。」

茂三「空振り。」

吾郎「お前にはマンガ家になる運が無かったってことだな」

茂三「あと2球残ってるでしょ。次はホームランよ、ホームラン」

吾郎「投げる。」

茂三「当たれ」

茂三「大きく空振り。」

由実「茂三、肩の力を抜いて。ボールをよく見て」

吾郎「最後に、約束は守れよ」

吾郎「投げる。」

茂三「お願い、当たれ」

茂三「バットに球を当てるが、打ち上げてしまつ。」

吾郎「フライでアウトだ」

その時、上空で強風が吹き、打球が流される。

打球は川まで流され、川にポツチャンと落ちる。

茂三「茫然と球の行方を見ている。」

伊藤「ホームランだよ、ホームラン」

茂三「うそ。キャー」

茂三「バットを投げ捨て飛び上がる。」

由実「追い風が吹いたのね・・・」

吾郎「茂三の様子を見ていたが、好きにしろ」

吾郎「バットを拾って帰って行くことする。」

茂三「お父さん、ありがとう」

吾郎「振り返らずに歩いて行く」

大岩家・屑間・中

茂三と由実がお茶を飲んでいるところ、店の方から伊藤が入ってくる。

伊藤「こんにちば。あつ茂三ちゃん、作品入賞したんだって。おめでとう」

茂三「いや、デビューはまだまだです。まだ話が固いつていうか力みがあるって・・・」

由実「お久しぶりですね、先生」

伊藤「はい。今朝、吾郎さんから電話があつて」

吾郎「吾郎が大きな包みを持って入ってくる。」

吾郎「おつ、先生来たな」

吾郎「たんすから封筒を取り出す。」

吾郎「茂三、これ声出して読んでみる」

茂三「いぶかしげな顔で受け取り、封筒の中から白い紙を取り出す。」

茂三「誓約書。何これ」

吾郎「いいから読め」

茂三「私、大岩茂三は三年以内に漫画家として世の中に出ることができない場合は、両親の言いつけに従ってきちんと就職いたします、って何よこれ」

吾郎「いいから続き読め」

茂三「・・・私、大岩茂三は漫画家として活動する場合は、本名以外の筆名は使用しません。えー」

吾郎「読んだな。そこに署名しろ。先生に立合人になってもらう」

茂三「ちよつちよつと待つてよ」

吾郎「お前が夢を持つのは約束通り認める。だが、悠長に構えられちゃたまらないから。お前が『ひいひい』と言ってくれたように店だつていつ潰れてもおかしくない状態だしな」

茂三「名前は関係ないじゃん」

吾郎「あの鈴風サントカつて名前か。バカバカしい。正々堂々と自分の名前で勝負しろ」

茂三「勝負つて」

吾郎「いい名前だろ。チャンスに強い」

茂三「泣くふりをして」

茂三「ひどいつ、娘に誓約書かかせるなんて」

吾郎「親の希望にそわなくせに、今更何が娘だ。俺は今日からお前のスポンサーだ」

茂三「勝手に決めないでよ」

吾郎「ほら、サインしろ。それともまた出て

行くか。貯金ゼロで。バイトバイトでマン

ガなんかかく暇なくなるぞ」

茂三「オニッ」

茂三「由実の方をうかがうが由実うなつくのみ。」

茂三「しびしび誓約書にサインする。」

吾郎「よしっ契約成立記念にスポンサーからのプレゼントだ」

吾郎「持ってきた包みを開ける。」

中から1m×1mぐらいの、四角い黒い機械が出てくる。

吾郎「コンセントをつなぐと、機会の

正面に「契約期限まで あと1994日」という電光の赤い文字がパツと浮かび

あがる

黒い機械は電光掲示板であった。

茂三「げっ、何これ」

吾郎「プロになれば、締め切りの厳しいプレッシャーがあるんだ。これは一つの訓練だ」

由実「茂三、お父さんなりの応援なのだ」

茂三「握りこぶしをふるわせながら、

茂三「明日にでも即デビューして、契約無効

にしてやる」

吾郎「おう、楽しみだな」

茂三「吾郎をにらみつける。」

伊藤「これからは本場の勝負ですね…ッ」  
伊藤「こらえきれなくなり爆発的に笑

い始める。」

茂三「吾郎、伊藤をにらみつける。」

伊藤「だっ、クク、電光掲示板ですよ」

伊藤「笑いを抑えきれない。」

茂三「人ごとだと思っ」

伊藤につられ、由実も笑い始める。

茂三「お母さんまでっ」

由実「だっ…電光掲示板よ…」

吾郎「そんなに変わったか…」

吾郎「情けない顔になる。」

茂三「三人の様子を見ていたが、怒り

の表情が少しずつ崩れていく。

茂三「もっ」

茂三「居間を出て行く。」

同・茂三の部屋・中

茂三「例によって机に向かいマンガを

かいている。

マンガの原稿に、茂三のマンガには今まで無かったようなコミカルな絵がかきこまれていく。

茂三の顔に笑みがこぼれる。

窓の外には青空が広がっている。

了